

資料紹介

「王学会記録簿」の解題と翻印

町 泉寿郎
鈴 置 拓 也

筆者はかつて本学附属図書館に所蔵する山田済斎文庫の山田準宛書簡から東敬治書簡を取り上げて、東敬治が運営の中心となった陽明学会について紹介したことがある。東敬治は陽明学の振興と世道人心の扶植のために（明善学社規則第一条）、明治三十九年（一九〇六）三月から王学会の機関誌『王学雑誌』（明治四十一年十月三巻七号まで）を月刊発行し、更に明治四十一年（一九〇八）には運動組織を強化するために洪沢栄一・大倉喜八郎・鳥尾小弥太・菊地晋二・大倉衆輔・渡邊忠・吉川重吉・朝吹英次・田島信夫らに呼びかけて陽明学会を立ち上げ、機関紙『陽明学』を同年十一月三日（紀元節）に発刊し、昭和三年（一九二八）に至るまで二十年にわたって活動していた。本学附属図書館に所蔵する山田準宛の東敬治書簡は明治四十一年以降のものであり、その書簡から陽明学会の活動状況がよくわかる。

これとは別に、本学附属図書館には三島毅（中洲）・復（雷堂）父子の旧蔵にかかる「三島文庫」が未整理のまま所蔵されている。近年、私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「近代日本の「知」の形成と漢学」の研究活動の一環として、その資料整理を進めている。その資料群のなかに、陽明学会が設立される以前に陽明学の研究と普及を行った学術団体「王学会」の活動記録があるのを見出したので、ここにその解題と翻印を掲げてその内容を紹介したい。

同会は、以下に示す翻印によって明らかのように、明治三十六年（一九〇三）九月三十日に、中尾捨吉（一八四一～一九〇四）、奥宮慥齋門、号水哉）が首唱し、春日仲淵（一八四三～一九一六、潜庵次男、号白水・竹酔）・宮内黙藏（一八四六～一九二五、山田方谷門、号鹿川）・東敬治（一八六〇～一九三五、澤瀉男、号正堂）が賛同して、上記四人によって水道端の曹洞宗日輪寺（現文京区小日向一―四―一八）を会場として始まった。標札・書見台・名簿・印章などの備品を各自が持寄り、文字通り手弁当て始めた会であった。本記録に見る限りその最後は明治四十一年（一九〇八）十月であり、この五年間の活動記録である。

二松学舎にこの記録簿が伝えられた理由は、その筆跡から判断して、明治四十年七月以降は三島復の手で記録されていることから、同会の末期に記録や講演・講義など会務の中心となったのが三島復（一八七八～一九二四、三島中洲三男、号雷堂）であり、その手許に記録簿が遺されたためと考えられる。

先ず本資料の書誌事項を記せば、書型は縦二二、七糎、横一五、七糎。表紙には左肩に「記録簿」と毛筆で打付け書きにし、右下に「王學／會印」の印、右上に二松学舎の印を捺すが捺し損なったためか印の中央部分の文字を缺いている。本文は半丁十行、四周双边（縦一九、五糎、横一三、〇糎）、単魚尾の柱刻、左辺外下部に「10大慶堂板」と記された青色の罫紙用箋を用いて毛筆墨書され、同用箋三二枚をステープラ（ホツチキス）で袋綴じにしている。なお、「王學會印」の印章は、発足時に東敬治が同会に寄附したものである（本文四丁表参照）。

記録者は、その筆跡から見る限り、特に初めの一年間は一定していない。宮内黙藏・東敬治・高瀬武次郎ら主要な会員の自宅において持ち回りで開かれることも多かったため、そのつど会場提供者などが記録にあたったことによると考えられる。明治三十七年三月より当分の間、宮内黙藏宅に仮事務所を置くこととなった。その後、明治三十七年十二月からは講演者・出席者などの名を記す場合に高瀬武次郎（一八六九～一九五〇、号惺軒）だけが敬称なしで記されていることから、明治三十七年十二月から明治四十年五月までは高瀬武次郎が記録者であったことが分かり、この時期には高瀬が会務を執っていたと考えら

れる。既記のとおり、その後、三島復が記録者となつてゐるが、これは高瀬武次郎が明治四十七年七月に京都帝国大学助教に招聘されて東京を離れることになつたためである。

「陽明学ノ講究」を目的に掲げた王学会では、その経常的な活動として、『伝習録』の講義を会員諸氏が行なう「例会」を当初は第一・第三日曜日の毎月二回開催することに定めたが、すぐに月二回の開催は難しくなり、月一回のペースがほぼ維持された。明治三十七年七月からは新たに公開演説会（公開講演会）を毎月第一日曜日に東京学院を会場として開くこととなり、翌三十九年一月の第二十回まで継続実施された。これと並行して、明治三十七年十二月からは従来の「例会」を継承するものとして毎月第二日曜日に会員宅を会場とした「講究会」を開くこととなり、毎月二回の開催が定例化する。公開演説会の会場はその後、東洋殖民学校や神田の開成中学校に会場が移り、定例化に伴つて記録内容は簡略になつていき、会場は多くの場合記されず、通算回数のみで記されていく。高瀬武次郎から第三十六回までの記録を引き継いだ三島復は通算回数も記していないが、月例開催は維持されている。記録によつて確認できる日時と会場と通算回数は別表のとおりである。

本記録がカバーする明治三十六年九月三十日から同四十一年十月（一九〇三〜一九〇八）はいうまでもなく日露戦争をはさむ時期に当たつてゐる。本会の結成時、既に三宅雪嶺の『王陽明』（一八九三年、政教社）や井上哲次郎の『日本陽明学派之哲学』（一九〇〇、富山房）・『日本倫理彙編陽明学派の部』（一九〇一年、育成会）は刊行されているが、その一方で吉本襄らが明治二十九年七月に鉄華書院から発刊した雑誌『陽明学』は先に明治三十三年五月に第七十九・八十号合本までで廃刊になつており、明治三十九年三月に東敬治が明善学社を立ち上げて機関誌『王学雑誌』を月刊発行するまでにはまだ間がある。したがつて本記録に記された情報は、鉄華書院版『陽明学』と明善学社版『王学雑誌』の間をつなぐ時期における、それらによつて捕捉できない陽明学関係の活動として意義がある。

時期的に一部重なり合う明治三十九年三月に発刊される明善学社版『王学雑誌』と本会との関係については、別表に示したように本会による公開講演会の講演内容が『王学雑誌』に収録されることもあつたが、それは全部で一〇〇題をはるかに超え

る本会の講演のうち僅かに八題に過ぎず、本会が東敬治の活動と密接な関係があったとは言えない。

前述のように、王学会の首唱者四人（中尾捨吉・春日仲淵・宮内黙藏・東敬治）たちはいずれも、幕末以来の各地の陽明学者の学統・血統を受けつつも、大学（この時点では事実上、東京帝国大学しかない）に学んだ研究者ではなく、民間学者といふべき人々である。これに対して、創設の翌年（明治三十七年四月）から参加するようになったのが、東京帝国大学文科大學漢学科を明治三十一年七月に卒業した高瀬武次郎である。他に、帝大系の人物としては、二松学舎から帝国大学文科大學古典講習科に進み漢書課（後期）を明治二十一年に卒業した山田準（一八六七～一九五二、山田方谷養孫、第七高等学校造士館教授）と西村豊（陸軍教授、号越溪）、遠藤隆吉（一八七四～一九四六、明治三十二年東京帝大文科哲学科卒）、前出の三島復（明治三十七年東京帝大文科漢学科卒）がいる。

しかしながら、三島復が継承した明治四十年末以降は参加者数が少ない状態が続いており、こうした状態を東敬治らが座視できなくなっていたことは容易に想像しうる。東敬治らのその後の陽明学振興は、少数の専門家向けの研究会にとどまるのではなく、より広い大衆を対象としようとし、そのための運動組織の拡大へと進んでいった。その意味で本資料は、この後の陽明学の展開を考える上でも貴重な資料である。

翻印の凡例

- 一 以下の翻印の底本は、二松学舎大学三島文庫所蔵の写本『王学会記録簿』である。
- 一 翻印はできるだけ底本の体裁を残すことを基本とし、漢字表記については、できるだけ底本の用字に従った。
- 一 底本の変体仮名は、平仮名・片仮名に改めた。
- 一 底本の行詰め・字詰めには必ずしも従わなかった。
- 一 読み易さを考慮して、底本にはない句読点・並列点を適宜補った。
- 一 丁表・丁裏の変わり目には (1a) ～ (29b) を補入した。

【翻印】

(表紙) 記録簿 印記「王學／會印」

明治三十六年九月三十日午後二時、王學會開設ノコトヲ小石川區水道端町五十八番地日輪寺ニテ協議ス。會スル者、首唱者中尾捨吉、及ヒ春日仲淵・東敬治・宮内黙藏ノ四氏トス。議畢リテ退散ス。

同四日、宮内氏假規約ヲ製ス。又王學會標札ヲ日輪寺ノ門柱ニ掲ク。但シ標札ハ宮内氏寄附ス。

十月十一日午後一時開講ス。中尾・東・宮内三氏來會ス。春日氏旅行ニ付欠席ス。中尾氏先ツ開會ノ主旨ヲ述へ、宮内氏傳習録上卷徐愛録ノ序ヲ講ス。尋テ談話ス。傍聽者三人、曾田文甫・大塚豊(1a) 三郎・足助直三郎。皆東氏知ル所ノモノトス。五時退散ス。決定スル所ノ假規約、左ノ如シ。

假規約

第一條 本會ハ陽明學ヲ講究スルヲ以テ目的トス。

第二條 本會ハ永世無窮ニ繼續スルヲ期スルカ故ニ、何等ノ否運ニ遭フモコレヲ廢スルコトナシ。

第三條 會員ヲ分チテ左ノ三種トス。

特別會員 賛成會員 通常會員(1b)

第四條 特別會員ハ本會ヲ創立維持シ、及ヒ本會總テノ會費ヲ負擔ス。賛成會員ハ本會ノ主旨ヲ賛成シテ入會スルモノトス。通常會員ハ本會ノ主旨ヲ賛成シ入會シテ斯學ヲ講究スルモノトス。但シ賛成會員通常會員ハ何時ニテモ特別會員タルコトヲ得。

第五條 通常會員トシテ入會セントスルモノハ現會員ノ紹介ニ依ル。但シ一切ノ會費ヲ要セス。

第六條 本會ノ講義及ヒ演說ヲ傍聽セント欲スルモノハ何人ト雖コレヲ許ス。

第六條^七 本會ノ開講日時及ヒ書目、當分左ノ如シ。(2a)

毎月 第一日曜日午後一時ヨリ 傳習録 毎月 第三日曜日午後一時ヨリ 傳習録

但シ講義後演説又ハ談話會ヲ開ク

第八條 本會講義ハ特別會員ノ擔任トス。但シ臨時賛成會員ノ講演スルコトアルヘシ。又通常會員ニ於テ希望者アルトキ

ハ講演スルヲ許ス。

第九條 本會ノ目的ハ専ラ王子ノ説ヲ遵奉スト雖、他ノ學ノ斯學ヲ裨補スヘキモノハ廣クコレヲ講究シテ隨時演説ヲナス

コトアルヘシ。

第十條 本會幹事一名ヲ置キ、庶務會計書籍管(2b) 理等ノコトヲ掌ル。但シ幹事ハ特別會員ニ於テコレヲ互撰シ、任期

ハ半ケ年トス。

第十一條 本會ニ文庫ヲ置キ、漸次經子・歴史・地理・哲學・理學・政治・法律・經濟等ノ諸書ヲ購求貯藏シ、斯學ヲ講究

スル傍ラコレヲ研究シテ、國家經綸ノ材ヲ發達セシムルノ用ニ供ス。

第十二條 本會ハ春秋二季ニ報告會ヲ開キ、幹事諸般ノ報告ヲナスヘシ。

第十三條 本會ニ備フルモノ左ノ如シ。(3a)

會員名簿 記録簿 會計簿 書籍目録 書籍 新聞雜誌 文具 見臺一 書籍箱 硯箱 其他

明治三十六年十月

同十八日午後一時開講。中尾・東・宮内三氏來會。傍聽者、曾田文甫・足助直次郎・大塚豊三郎・高瀬武次郎四名。講畢リ

テ談話ス(3b)。

徐愛録小序 中尾 愛問在親民一章 宮内 愛問知止一章 東

寄附品左ノ如シ。

見臺一脚 會員名簿外二冊 東洋哲學雜誌一冊 但シ自今毎月一回ツ、 王學指掌 宮内氏著 王學會印章一個

右中尾氏

右宮内氏

右東氏

十一月一日例刻開講。中尾氏宿痾心臟ヲ患ヒ、東氏事故アリ欠席。傍聽者、曾田文甫・春日精之助(4a)二名。

愛問至善只求諸心

二章 宮内

鄭朝朔問

十一月十五日休會ス。是ヨリ先、中尾氏宿痾未愈ノ故ヲ以テ欠席ノ通知アリ。尋テ宮内氏腰痛起臥ニテ亦出席スル能ハス、ヨリテ困難ナルヲ以テ、本日出會ノコトヲ東氏ヘ依頼ス。東氏、中尾氏ト協議ノ上、流會ストノ通報アリ。開會未タ經旬ナラスシテ一頓挫ヲ致シヌ。規約第二條ノ旨ニ背クコト多シ、慙…。

十二月六日中尾氏病氣ノ故ヲ以テ東氏、同氏ト協議ノ上、本會當分中止ノコトヲ報シ越シヌ(4b)。

明治三十七年二月七日本會ヲ麻布区六本木町ナル東敬治氏ノ宅ニ開ク。高瀬武次郎之に會す。宮内氏疾にかゝりて會せず。是より先東氏、宮内氏宅へ來りて本會ヲ宅廻リトシテ繼續ノコトヲ議ス。故ニコノ開會アリ。

三月六日例會ヲ牛込區白銀町ナル宮内默藏氏ノ宅ニテ開ク。會スルモノ東敬治・高瀬武次郎及ヒ宅主三人トス。談話了リテ小酌ス。コノ日高瀬氏ノ發議ニヨリ特別會員ノ毎月會費額及假事務所ヲ定ムルコト左ノ如シ。

一 特別會員タルモノハ毎月金參拾錢ヲ徵收ス(5a)ルコト。

一 當分假事務所ヲ牛込區白銀町三十二番地宮内默藏氏ノ宅ニ眞ク。

三月四日例會ヲ武瀬武次郎氏ノ宅ニ開ク。東敬治・杉山敦磨二氏來會ス。宮内默藏氏病ノ故ヲ以テ會スルヲ得ス。

五月一日例會ヲ東敬治氏宅ニ開ク。宮内默藏氏先至ル。次テ高瀬武次郎氏・杉山敦磨氏同時共至。來ル日曜ノ例會ヲ以テ神田東京學院ニ移シ公開講演ヲ開クトニ付討議一決ス。高瀬氏致良知(5b)ノ三字ニ就テ問題ヲ提出ス。於是討論刻ヲ移シ最佳境ニ入ル。默燈ニ及ンテ別ル。是日雨頗甚シ。而シテ數氏皆約ヲ愆ラズシテ來會セシハ、其眞誠亦知ルヘキナリ。

六月五日第一日曜 例會ヲ神田仲猿樂町東京學院ニ於テ開ク。宮内默藏氏先ツ教育勅語ヲ奉讀シテ開會ノ趣意ヲ述フ。次キニ東敬治氏知行合一ヲ説ク。次キニ會外有志世木鹿吉氏誠ノ説ヲ述ヘ、終リニ高瀬武次郎氏王陽明五溺ノコトヲ演説シテ閉

會ス。此日杉山敦麿氏親戚ノ喪ヲ以テ來ラス。來聽者凡ソ五拾有餘名中ニ婦人一名及ヒ陸軍幼年學校生徒(6a)ラシキ者三名アリ。頗ル盛會ナリト謂フヘシ。尤今後開會ノコトニ付東氏、宮内氏ト異見アリ。異日ノ確定ヲ要ス。

六月二十五日土曜日 相談會ヲ宮内氏ノ宅ニテ開ク。會スルモノ東・春日二氏、及ヒ新ニ賛成會員トシテ入會スルモノ今井梧陰・山川早水、特別會員トシテ入會スルモノ世木鹿吉・鈴木栄作ノ四氏トナス。自今毎月例會ヲ了リテ後一時間程ヲ談話ノ席トナシ諸事ノ打合ヲナスコトニ一決シ、其他有志義納金等ノコトハ未タ議(6b)決ノ運ヒニ至ラサリキ。コノ日杉山敦麿氏事故アルヲ以テ來會セス。世木氏ハ此日ニ會員タルヲ一決ス。

七月三日例規ニ因テ公開演說會ヲ神田東京学院ニ開ク。宮内氏ハ四言教、高瀬氏ハ逆境ノ王陽明、世木氏ハ誠ノ研究第二トシテ、東氏ハ立志等ノ演題ヲ設ク。春日氏ハ精神ノ脩養ヲ説ク筈ナリシモ來會ナシ。杉山氏モ來會ナシ。是日廣告ノ手續ニ行違アリテ一ツノ廣告ヲ開會前ニ発スル能ハサルニ付、來聽者ハ極メテ少数ナリ。但シ來聽者中松田盛吉氏ハ此日入會ニ決ス(7a)。廣告ヲ依頼スベキ新聞社(7b)

神田雉子町 日本新聞

京橋区 町 萬朝報

銀座二丁目 讀賣新聞

京橋日吉町 國民新聞

京橋区三十間堀 報知新聞

神田錦町 二六新聞(8a)

第二回公開講演 明治三十七年七月三日神田東京学院内

當日新聞ノ廣告ヲ忘レシ為、聽講者貳拾餘名ニ過キス。特別會員、宮内・世木・東・鈴木・高瀬以上出席。

第三回公開講演 明治三十七年八月七日前同所に於て 演題并出演順

人生の眞意義 高瀬君 王門の二王 東君 誠の研究其三 世木君 國運の發展と到良知 宮内君(8b)

是ノ日來會者四拾名餘、春日氏ハ事故、杉山氏ハ歸國セルヲ以テ來會セス。尚今後第二日曜日午後第一時ヨリ別ニ懇話會を特別會員ノ宅ニテ催スコトヲ約シテ散會ス。

第四回公開講演 明治三十七年九月四日同所ニ於テ 演題并ニ出演順

良知論併セテ提要中ノ數章ヲ講ス 高瀬君 文學トシテノ王陽明 東君 良知ト聲色貨利併セテ提要中ノ數章ヲ講ス 宮内君

(9a)

是ノ日聽衆五拾名餘、世木君ハ時間無之ヲ以テ此回ハ休講。春日・杉山二氏ハ來ラス。本所相生町五丁目二十八番地津田文三氏通常會員トシテ入會ス。

九月十一日第二日曜午後第二時ヨリ懇話會ヲ宮内默藏氏ノ宅ニテ開ク。會スル者東・世木及ヒ宅主ノ三人トス。是日高瀬氏來會無之。本會日ヲ第三日曜ニ繰替ル可也トノ評議アルモ未タ決定セス。(9b)

第五回講演 明治廿七年十月二日同所ニ於テ 演題並ニ出演者

誠ノ研究第四 世木君 山田方谷ニツキ 三島君 心則理^{マコト} 高瀬君 義理ノ弁 時事所感 宮内君 王陽明家學(次

回ニユツル) 東君 此日春日君・權藤君來席アリタリ (10a)

第六回公開演說

山田方谷論 三島復 王學之特徵 高瀬武次郎 陽明學提要講義 宮内氏・東氏

當日杉山敦麿氏來會。東京学院ニ開會、傍聽者參拾名位。岡崎震二氏通常會員として入會ス(三嶋君之紹介)。

三島君ノ紹介ニテ普常會員トシテ入會ス(十一月廿一日) 那智典

高瀬ノ紹介ニテ特別會員トシテ入會ス(十一月十九日) 遠藤隆吉 西片十、二四号 (10b)

第七回演說(十二月四日)

山田方谷鬼神論 三島復 中江藤樹 宮内默藏 陽明學提要講義 高瀬武次郎 全 東敬治

右東京学院ニテ開ク。來聽者凡三拾名位。吉岡佑・岡田元彌二氏、通常會員トシテ入會ス。(11a)

(※別紙貼付) 芝区西久保巴町 東京区裁判所 粟田佐一 富山縣平民 三十七年十二月十八日通常會員トシテ入會ス

(11b)

明治三十七年十二月十一日、宮内氏宅ニテ講究會ヲ開ク。會者拾壹名。東氏、蕭惠克治難ノ一節ヲ講ス。次回ノ講演及講義者ヲ定ム。三十八年一月ノ講究會ハ三島氏宅トス。演說會幹事ハ世木氏ト決ス。

第八回演說會（三十八年一月八日） 當日演題

誠ノ研究（文天祥正氣歌）世木鹿吉氏（12a） 王子ノ家學 東敬治氏 陽明學提要講義 三島復氏 同 高瀬武次郎
此日聽衆三拾名位。大塚某來聽。宮内氏來會セシモ講演セラレサリキ。聽衆多カラザルモ皆ナ熱心ニシテ殆下毎会出席スル者ノ如シ。頗有望ナリ。世木氏正氣歌ノ講義及朗吟ハ慷慨熱誠大ニ感動ヲ与フ。

三十八年一月第三日曜十五日、講究會ヲ三島復氏ノ宅ニ催ス。（12b）

（※名刺貼付）東京学院主 手島徳五郎 東京市神田區猿樂町二十五番地

當日會者拾名ナリ。講演ハ、聖人精金之章 高瀬武次郎（13a）

第九回演說會（二月五日）

良知固有論 高瀬武次郎 誠之研究 世木鹿吉君 王學提要講義 東敬治君（?）

第四回^五講究會（二月十九日）

宮内默藏氏 王嘉秀之章（上卷）。東氏宅、會者十三名。（二十錢柿内氏、拾五錢岡田氏）入。（13b）

演說第十回 三月五日第一日曜 於東京学院 晴天、聽衆五十名位。

倫理的宗教 高瀬武次郎 講義（七十七頁） 東氏第四十九^六章 宮内氏第四十九章

世木氏風邪之為休ム。追々隆盛ニ赴ク。當日入會者黒瀬氏・練木氏（以上特別）、東恭吉・杉原幸次郎・漆氏（以上通常トシテ）入會ス。

講究會 三月十二日第二日曜日 麻布六本木町一、大口鯛二氏宅ニ開ク。來會者貳拾餘名。

侃去花間草章講義 東敬治氏（14a） 王陽明之三不朽 高瀬武次郎 為善去惡に就ての質疑 宮内默藏氏

新入會者は山田十一郎（特別）、大谷辰三郎、鈴木栄之丞（特別）、横地正邦、大塚豊なり。此日質問應答等頗る隆盛之兆あり。

一金九拾錢 大口氏一、二、三月分 一金參拾錢 鈴木栄之丞氏三月分 一々參拾錢 山田氏三月分

一々五錢 大谷辰三郎氏三月分 一々參拾錢 一、二、三、四、五、六月分 (14b)

第拾壹回 四月二日

善惡の辨 大塚豊三郎氏 誠ノ研究 世木鹿吉氏 陽明学提要講義 三島復氏・春日仲淵氏

此日聽講者參拾名斗、常例に比して甚少し。

第 回講究會 幹事春日氏 四月十六日今回ヨリ神田一ツ橋際學士會集會所トス。(15a)

此日都下櫻花滿開、天氣晴朗、最遊覽ニ適スルノ時ナリシ故ニヤ、會者多カラズ。東氏・三島氏等モ欠席。會者凡拾名ノミ。宮内氏、愛因未會先生知行合一之訓云云の章ヲ講セラル。其後同氏二三ノ質疑アリ、議論盛ニ起ル。席料五拾錢、煎餅式拾錢也。

第拾貳回講演 五月七日 此日雨天聽衆式拾餘名。

一 同體異用 三島毅先生 一 我宿病 大塚豊三郎君 一 王学提要講義 東敬治君 (15b)

第拾參回 六月四日 (第一日曜)

一 王子之不動心 三島復君 一 吾心獨無主乎 (欠席) 土屋弘君 一 王学提要講義 宮内默藏君 一 養氣論
高瀬武次郎

此日市中日本海海戰祝捷等の為に聽衆參拾餘名に過ぎず。曾田文甫氏始て來會す。研究會第一回公開演説ありて中途彼に赴ける者もありき。土屋氏之講演ハ原稿を送られしも次回 (16a) に欠席を願ふこと、決したり。

六月拾一日 講究會

神田学士會事務所ニ於て開會す。會者拾壹名、新入者一名。

第拾四回 七月二日

吾心独无主乎 土屋弘君 武士道之普及 世木鹿吉君 王学提要講義 三島復君

當日聽衆約四十名。(曇天)。新入會者一名(鶴峯、河原)。(16b)

七月九日 (第二回) 講究會

神田学士會にて會者拾名。東氏、至誠前知憶逆之章(中卷七十三)を講し了て、質疑起り仲々盛なりき。(席料五拾錢也)。

第拾五回 八月六日

王学と麿島 山田準君 養氣說 曾田文甫君 陽明学提要講義 三島復君

當日聽衆四拾五六名位。清水康次氏來聽入會。島田蕃根氏來聽。先隆盛之方ナリ。天氣稍曇(17a) 天ナリキ。

(神田区美土代町三丁目十一番地長田方小阪良郎)

第 回講究會 八月十三日 神田学士會事務所にて會ス。

宮内氏講演 此日會費(席料) 壹圓也。尔後暫時宅廻シトス。會者十名位。

第十六回 九月三日公開 聽衆式拾餘名ナリシは、屈辱的講和成立之報傳り人心銷沈せしに因らん。

最簡倫理学 高瀬武次郎 方谷先生年譜に就て 宮内黙藏氏 陽明学提要講義(17b) 那智典氏

第 回 講究會 九月十日 今回より宅廻として高瀬武次郎宅に於て開會す。會者十名なり。

東氏、傳習録下卷郷愿狂者之章を講シ、時事問題も論せられて仲々盛會なりき。

第十七回 十月一日 公開 雨天、聽衆式拾七八名。當日入會者一名。

天照太神と良知 世木氏 池田草庵の事略評論 東氏 王学提要(18a) 講義 高瀬氏

十月六日山田準氏分印刷物を求め來る。三十五六枚ツ、十六ペーシ迄郵送ス。

十月八日第二日曜 牛込区白銀町宮内氏宅にて會す。會者拾餘名。(晴天)。

上卷四拾九枚喜怒哀樂之章宮内氏講す。(18b) (※白紙一葉)

三十九年二月四日 第二十一回公開講演

一 隨處自得説 高瀬武次郎 一 名教ヲ興スノ議 宮内黙藏 一 王學提要講義 東敬治

此日神田錦町三丁目東洋植民学校へ移轉す。聽衆多カラズ。蓋シ轉居後早ミナリシ故ナラン。

三月四日 第貳拾貳回(於東洋植民学校) 此日聽衆貳拾餘名。

一 我が心法 陸軍教授西村豊君 一 嗚呼トランスボール 世木鹿吉君 一 王學提要講義 三島復君(20a)

明治三十九年三月十一日第二日曜、講究會開催。上野公園三宜亭ニ於テ宮内氏還曆祝と高瀬氏病氣全快祝及學位受領祝と王學會懇親會及例會と合併開催す。會費老圓也。會者拾五名也。

四月一日 第貳拾參回公開講演(於東洋植民学校)

先心洞ノ學風 高瀬武次郎(20b) 陽明學ト進化説 大塚豊三郎 王學提要講義 宮内黙藏

當日會者貳拾名位。衆散セシ後、宮内・三浦二氏及高瀬ノ三人談話壱時間ニシテ歸ル。

四月八日(第二日曜) 講究會 高瀬武次郎宅ニ於テ會ス。三浦氏・杉山氏・湯本氏・東氏・井上氏・柿内氏・岡田氏・大

谷氏・鶴峰氏・並友人一名。吉岡氏・杉原氏・黒瀬氏・高瀬、他二三名傍聽。十七名(宮内氏欠)。(21a)(21b)

五月 第貳拾四回演説(東洋植民校ニテ) 当日聽衆參拾名位。

一 精神眞理不二 海江田氏 一 春風春水一時來 東氏 一 大學問講義 宮内氏

六月三日 第二回講究會 東氏宅ニ開ク。

六月第貳拾五回 演説會(第貳日曜日)(開成中学校) 当日雨天聽衆貳拾四五名。

一 知行合一と自悟 長谷川氏 一 報恩 三島氏(22a) 一 大學問講義 宮内氏

七月第貳拾六回（第一日曜日）（開成中学校内） 聴衆拾余名。

一 魏叔子の王陽明評 東氏 一 偉人之臨終 高瀬氏 一 大学問講義 宮内氏

八月第貳拾七回

七月第二之會ハ宮内氏宅ニ於テス。會者三浦氏・東氏・柿内氏・鶴峰氏・湯本氏・田尻氏・（22b）宮内氏・井出氏（入会）・高瀬・練木氏十名也。

八月 第二十七回 第一日曜 聴衆三十名位。

王陽明之六主義 三島復 王学提要講義 宮内氏

九月 第二十八回 第一日曜 聴衆三十余名。

支那之三偉人 塩見平治郎 東北漫遊所感 大塚豊三郎（23a） 王学提要講義 東氏

十月 第二十九回 晴天、聴衆三十余名。

藤田東湖と須太因 海江田氏 陽明学と事功 高瀬 王学提要講義 宮内氏（23b）

第三十回 十一月 三島博士

十一月第二會ハ宮内氏宅にて開會。（24a）

十二月二日（第三十一回）開成中学校 晴天、聴衆四拾名余。

一 誠 三島氏 一 修養と社交 高瀬 一 王学提要講義 東氏

十二月第二の會ハ高瀬宅にて開會（24b）

明治四十年一月十三日 第三十二回 開成中学 雪天、聴衆二拾七八名。

一 山田方谷と塩谷宕陰 三島君 一 新年所感 宮内氏 一 王学提要講義 東氏

一月二十日 東氏宅ニ開會。

宮内氏講義 道話二則 高瀬

二月三日 第三十三回 當日聽衆四十名斗。

一 陽明学大意 高瀬 一 未定^{我が心法} 西村氏 (25a) 講義 宮内氏

第二回ハ三浦氏宅ニテ。

明治四十年三月三日 第三十四回公開演説 聽衆二十名斗、晴天。

王学の二面 三島氏(復) 大塩中齋之学を論ず 東氏 王学提要講義 宮内氏

明治四十年四月七日 第三十五回

旧佐賀藩と王学 谷口氏 (25b) 人欲 三島復氏 一 講義 宮内氏

四十年五月五日 衆貳十七八名。

煩悶退治 高瀬 快楽と満足 湯本氏 講義 東氏 (26a)

十ッ壱圓五拾錢 端書代 一ッ弍拾五錢 印刷代 十ッ八錢 小包料 (26b)

七月廿日 梁日孚章 傳習録上 講義 三島復

八月四日 人生ノ三宝 斎藤氏 執中説 曾田氏 提要講義 那智氏 聽衆約三十名、改定規約を配布す。

八月十一日 統一学社 現世的因果律 高瀬博士

堀内伸太郎氏入會(神田区鍛冶町)、櫻井兵五郎氏入會(神田今川小路二、十五、梶丈太郎方) 普通八日十八日。

九月一日 聽衆約二十名、渡辺武助氏入會。

陸象山の学風 三島氏 儒学界の現況 宮内氏 提要講義 三島氏 帰郷所感 東氏 (27a)

八日 會者約十名。宮内黙藏氏 傳習録上 知行合一條 排禅慷慨談あり 三島氏小話

十月六日 雨甚 會者十名、山口氏入會。深井虎藏氏 中和説 三島復氏 王学提要講義

同十三日 會者四名。東氏 伝習録下 四言教條

十一月三日 雨 會者十四名。信吉氏入會、中山氏入會。

齋藤氏 乾坤往來と知行合一 三島氏 陽明の樂天觀 宮内氏 提要講義 (27b)

十日 會者九名。宮内氏 傳習録下 問近來用功下三章

十二月一日 晴 會者約十名。

大塩平之助氏 大塩中齋の学に就て 不知致良知 (王綱領致良知にて足る) 非教育家 (王よりの伊川) 泥古 (鞭朴ヲ常、

舜王の兵法ハ周官) 藏書家、致知ニ傾キ格物を重んぜず。

中齋の跡部奉行に對すること王の忍びて上書を書きかへて身を屈し恥辱を忍びて國家の安寧を事とせしと如何。

小人の跡部を化せずして之を屈せしめ、害を大坂の民に責りて自ら喜ぶ、小胸の人のみ。陽明的に雄大ならず、跡部をだしぬきたる等は虚偽あり。和田義盛に似たり。ピューリタン、(28a) 自由も自分が得ざる前にハ之を唱へ、得た後にハ他の派の自由を束縛す。これクロムウエル吾まゝの自由のみ。神の前にハ平等と云ひながら他派を奴隸とす。

提要講義 東敬治氏

十二月八日 會者僅三人。傳習録下大本四三、孟子功力聖智章、及孟子萬章下第一章 三島氏

四十一年一月十二日 聽衆十人。方谷先生の楠公七生説 三島氏 講義 宮内黙藏

鹿川翁懷旧談 廿五年一心不乱に学ぶ、十五年俗吏 (維新)、廿年下帷

良知てふさしがねをもてくらぶれば六十路の昔かこつわれかな (28b)

一月十九日 東氏 傳習録下生之謂性外一章

二月二日 聽衆約廿五名。衛生と知良知 柿内三郎 良知ニ定義アリヤ 塩尾平之助

二月九日 六人。定性書講義 三島復

三月一日 三人。提要 東氏

三月八日 四人。洗心洞笈記中一節 三島復

四月五日 十人。王学と赤穂義士木村貞行 西村豊

同十二日 傳習録下 宮内氏

五月三日 十餘人。主一の工夫 三島氏 講義 那智氏

同 十日 五人。東氏 講義

六月七日 廿二人。藤樹先生の人格 宮内氏 講義 三島氏

六月十四日 七人。劉戡山傳 三島氏 (29a)

七月五日 十四人。無妄 斎藤氏 提要 宮内氏

同十二日 六人。宮内氏 傳習録

八月二日 十七人。名利界の清涼剂 三島復 提要 宮内黙藏

九日 五人。拔本塞源論 三島復

九月第一日曜 王陽明の幼少時代 三島復 提要 宮内黙藏

第二日曜 伝習録 宮内黙藏

十月四日 吉田忠左衛門と王学 西村豊

十一日 言志耆録 三島復 (29b) (※以下白紙三葉)

注 1 町泉寿郎「東敬治書翰(山田準宛て)にみる陽明学会の活動」、『陽明学』二十、二〇〇八年。

2 戸川芳郎編『三島中洲の学芸とその生涯(雄山閣出版、一九九九年)』には、附篇として高山節也氏編にかかる「三島文庫別置本目錄解題」「三島文庫漢籍目錄」「三島文庫目錄」が収録されているが、なおこれに漏れているものが存する。

王学会開催記録及び『王學雜誌』への掲載

37												36					年										
8	7	6			5	4	3	2	12	11		10		9	月												
7	3	25	5		1	3	6	7	6	15	1	18	11	30	日												
第3回公開演説会		第2回公開演説会		相談会		第8回例会 (第1回公開演説会)		第7回例会	第6回例会	第5回例会	第4回例会	休会	休会	第3回例会	第2回例会	第1回例会	開設についての協議	公演の種類									
東京学院		東京学院		宮内黙蔵宅		東京学院		東敬治宅	高瀬武次郎宅	宮内黙蔵宅	東敬治宅		日輪寺	日輪寺	日輪寺	日輪寺	日輪寺	場所									
王門の二王(東敬治)		人生の眞意義(高瀬武次郎)		精神ノ脩養(欠席)(春日仲淵)		立志(東敬治)		誠ノ研究第二(世木鹿吉)		逆境ノ王陽明(高瀬武次郎)		四言教(宮内黙蔵)		王陽明五溺ノコト(高瀬武次郎)		誠ノ説(世木鹿吉)		知行合一(東敬治)		開會ノ趣意(宮内黙蔵)							
														愛問至善只求諸心、鄭朝朝問二章(宮内黙蔵)		愛問知止一章(東敬治)		愛問在親民一章(宮内黙蔵)		徐愛録小序(中尾捨吉)		傳習録上卷徐愛録ノ序(宮内黙蔵)		開会の主旨(中尾捨吉)		講演題目(講演者) ↓ 『王學雜誌』への掲載 卷(号)	
																備考											
																中尾捨吉の病氣により当分休会		高瀬武次郎初参加									

38			37							
2		1		12		11?	10		9	
5	15	8	11	4		2	11	4		
第9回公開演説会	第2回講究会	第8回公開演説会	第1回講究会 (第9回例会)	第7回公開演説会	第6回公開演説会	第5回公開演説会	懇話会	第4回公開演説会		
東京学院	三島復宅	東京学院	宮内黙藏宅	東京学院	東京学院	東京学院	宮内黙藏宅	東京学院		
王学提要講義(東敬治)	聖人精金之章(高瀬武次郎) 良知固有論(高瀬武次郎)	同(高瀬武次郎) 陽明學提要講義(三島復) 王子ノ家學(東敬治)	誠ノ研究(文天祥正氣歌)(世木鹿吉) ↓2(1、2)	全(東敬治) 陽明學提要講義(高瀬武次郎)	山田方谷鬼神論(三島復) 中江藤樹(宮内黙藏)	山田方谷論(三島復) 王学之特徴(高瀬武次郎) 陽明学提要講義(宮内黙藏・東敬治)	王陽明家學(次回へ)(東敬治) 義理ノ弁時事所感(宮内黙藏)	心則理(高瀬武次郎) 山田方谷ニツキ(三島復)	誠ノ研究第四(世木鹿吉)	良知トシテノ王陽明(東敬治) 良知ト聲色貨利併セテ提要中ノ數章ヲ講ス(宮内黙藏)
<p>誠の研究其三(世木鹿吉) 國運の發展と到良知(宮内黙藏) 良知論併セテ提要中ノ數章ヲ講ス(高瀬武次郎) 文學トシテノ王陽明(東敬治) 良知ト聲色貨利併セテ提要中ノ數章ヲ講ス(宮内黙藏)</p>										

9		8		7		6		5		4		3		
3	13	6	9	2	11	4	7	16	2	12	5	19		
第16回公開演説会	第8回講究会	第15回公開演説会	第7回講究会	第14回公開演説会	第6回講究会	第13回公開演説会	第12回公開演説会	第5回講究会	第11回公開演説会	第4回講究会	第10回公開演説会	第3回講究会		
東京学院	学士会事務所	東京学院	学士会	東京学院	学士会事務所	東京学院	東京学院	学士会集会所	東京学院	大口鯛二宅	東京学院	東敬治宅		
最簡倫理学(高瀬武次郎) 方谷先生年譜に就て(宮内黙蔵)	(宮内黙蔵)	陽明学提要講義(三島復)	至誠前知憶逆之章(中卷七十三)(東敬治)	吾心独无主乎(土屋弘) 武士道之普及(世木鹿吉) 王学提要講義(三島復)	養氣論(高瀬武次郎)	吾心独无主乎(欠席)(土屋弘) 王学提要講義(宮内黙蔵)	我宿病(大塚豊三郎) 王学提要講義(東敬治)	愛因未會先生知行合一之訓云云の章(宮内黙蔵)	陽明学提要講義(三島復・春日仲淵)	善惡の辨(大塚豊三郎) 誠ノ研究(世木鹿吉)	侃去花間草章講義(東敬治)	倫理的宗教(高瀬武次郎) 講義(七十八頁)(東敬治、59章・宮内黙蔵49章)	王嘉秀之章(上卷)(宮内黙蔵)	
								↓ 1 (3)						今回より学士会集会所にて行う

41		40													
1		12		11		10		9		8		7	5		
19	12	8	1	10	3	13	6	8	1	11	4	20	5		
(25回) 講究会 第42回公開演説会		(24回) 講究会 第41回公開演説会		(23回) 講究会 第40回公開演説会		(22回) 講究会 第39回公開演説会		(21回) 講究会 第38回公開演説会		(20回) 講究会 第37回公開演説会		(19回) 講究会 第36回公開演説会			
(開成中学校)		(開成中学校)		(開成中学校)		(開成中学校)		(開成中学校)		統一学社	(開成中学校)		(開成中学校)		
傳習録下生之謂性外一章(東敬治) 講義(宮内黙藏)		方谷先生の楠公七生説(三島復)		孟子功力聖智章及孟子萬章下第一章(三島復) 傳習録下大本四三(三島復)		提要講義(東敬治) 大塩中齋の学に就て(塩尾平之助)		傳習録下問近來用功下三章(宮内黙藏) 提要講義(宮内黙藏)		陽明の楽天觀(三島復) 乾坤往來と知行合一(齋藤)		傳習録下四言教條(東敬治) 王学提要講義(三島復)		中和説(深井虎藏) 傳習録上知行合一條(宮内黙藏)	
														東敬治の帰郷については『王學雜誌』2巻5号、6号の社告で報告されている	

